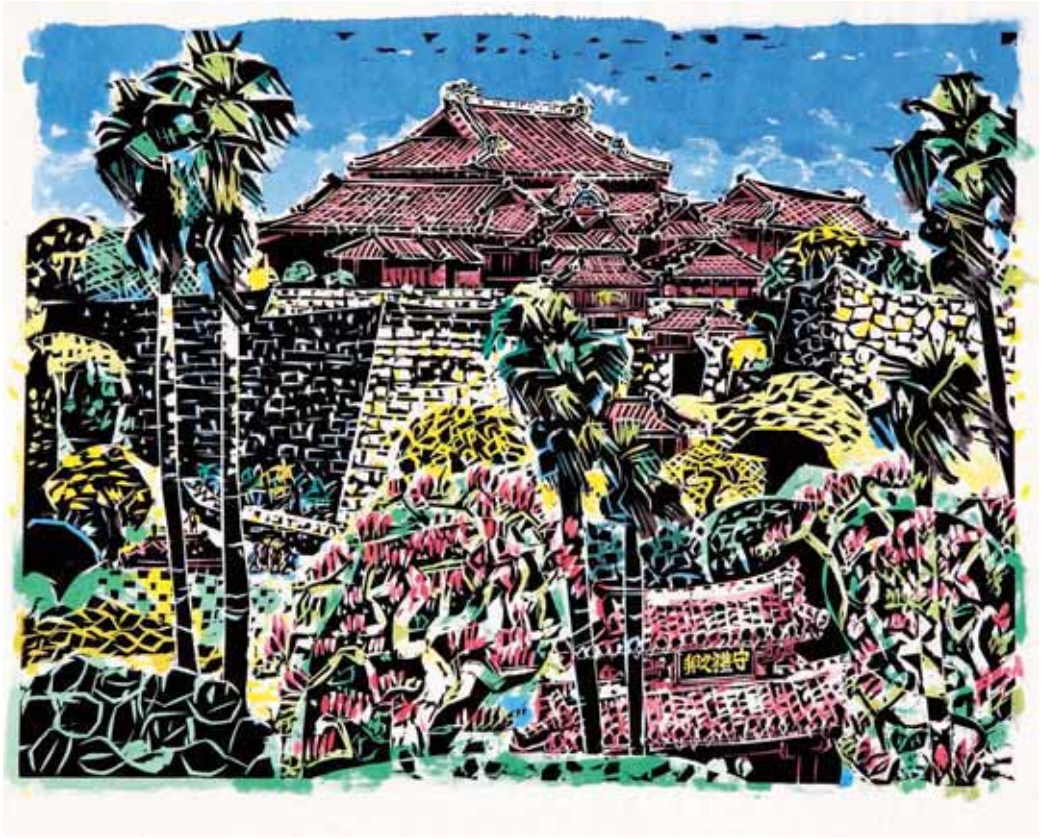
財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団広報誌

南ぬ風

Vol.9
2008.10~12
秋号



［南ぬ風インタビュー］沖縄県指定無形文化財保持者　浦添市美術館館長/前田孝允

《沖縄の色・形》島の風土が育んだ独特の柄と色合い/与那国織

ふしぎがいっぱい 公園点描

海洋博公園

バンコの森

「バンコ」とは、八重山の鳩間島の言葉で、夏に風通しの良い木陰や樹の上に板場を作って、そこで昼寝や情報交換をした場所のことをいいます。バンコの森には木造の建物があり、建物の２階ではアスレチック風の探検ができます。室内では自然の素材を使ったクラフトが楽しめるほか、竹馬や水でっぽう等のなつかしい遊びが体験できます。

財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団広報誌

季刊誌 南ぬ風 秋号 Vol.9 2008.10~12

編集・発行/財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団
2008年10月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川424番地　TEL.0980-48-2741(代)　FAX.0980-48-3339
(財)海洋博覧会記念公園管理財団公式サイト　kaiyouhaku.jp
国営沖縄記念公園公式サイト　oki-park.jp

南ぬ風（ふぇーぬかじ）

誌名『南ぬ風（ふぇーぬかじ）』について
「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

CONTENTS

03 南ぬ風インタビュー　Vol.2
首里城正殿は世界最大級の漆の器。
首里城の修復、復元ができる職人を育ててもらいたい。
沖縄県指定無形文化財保持者　浦添市美術館館長／前田孝允

06 沖縄の色・形
島の風土が育んだ独特の柄と色合い　与那国織
取材協力／与那国町伝統織物協同組合

08 沖縄の自然　南の島の植物と動物たち
シリーズ沖縄の大木②　ガジュマル
シリーズ沖縄の希少動植物②　カツウダケエビネ／メダカ

10 沖縄の民話
与那国の猫小（まやーぐわー）資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

12 公園の管理運営
オキちゃん劇場

14 財団の事業紹介
亜熱帯性動植物に関する調査研究・普及啓発事業
平成20年度夏休み特別企画「ビックリ！電子の目 ―電子顕微鏡で見る沖縄の生き物たち―」の開催／サンゴの有性生殖／イルカの疾病治療に関する研究／イルカ学習会／マングローブ調査／ブーゲンビレアの優良品種導入について
首里城に関する調査研究・普及啓発事業
清代中琉関係档案選編シリーズの出版

18 公園ニュース＆イベント情報
海洋博公園
海洋文化館関連民族芸能披露等／扇作り体験／鬼餅作り体験／アダンによる沖縄玩具作り体験／書道で楽しむ沖縄の魚たち／クロトン展示会
ハス乗り体験会／ブーゲンビレア展／ハイビスカス展／植物のクラフト作り／苗木無料配布／最新のみどりに関する講演会
首里城公園
平成20年度「首里城祭」・冊封儀式・琉球王朝絵巻行列・琉球王朝祭り「古式行列」／企画展「冊封使がやってきた！～琉球を訪れた中国の貴人たち～」

20 ふしぎがいっぱい公園点描
バンコの森　海洋博公園

表紙について

首里城

名嘉睦稔（なかぼくねん）
一九五二年伊是名島生まれ。版画家。造形作家。月桃紙に裏手彩色と呼ばれる技法で制作される作品群は、われわれ現代人が見過ごしてしまいがちな大自然の機微、生きとし生けるものの魂の声を、時に優しく、時に力強く、私達に伝えてくれる。

首里城正殿は世界最大級の漆の器。首里城の修復、復元ができる職人を育ててもらいたい。

首里城の復元に大きな功績を残した前田孝允氏。「琉球は漆文化の国だった」と語る前田氏に、沖縄の漆工芸について、首里城について語っていただきました。

Fe-nu-kaji Interview
南ぬ風インタビュー vol.2

沖縄県指定無形文化財保持者
浦添市美術館館長
前田 孝允
Kouin Maeda

「伝統工芸には作品、製品、商品の三つがある」

――沖縄の伝統工芸について、また、漆器の位置付けについてどのように感じていらっしゃいますか。

前田　沖縄県は漆器、陶器、織物、紅型の四つを伝統工芸品に指定していますが、工芸品の展示会などでは琉球ガラスもその範疇に入れて一緒にやっています。僕は、伝統工芸は三つに分けて考えないといけないと思っています。一つは作家がつくる作品、二つ目は製品、三つ目は商品です。例えば商品ばかり作っている人が、いきなり作品を作ろうとすると全然内容がないものになってしまいます。やはり、作品は作家として取り組んでいる人でないとできません。製品は沖縄の伝統工芸として堂々と販売できるもの、愛好家に買ってもらえるようなものです。商品は土産品ですね。それと工芸品には、その時代時代が作らせているというバックボーンがあります。

　漆器について言えば、一六〇九年に琉球に薩摩が入ってきますが、それ以前の琉球王朝時代のものは漆塗り、螺鈿（らでん）、沈金（ちんきん）などはすべて赤い色を使っています。模様も自然を賛美、謳歌しているようなものが多く非常に勢いがありました。薩摩は琉球に来てから三カ年後には貝摺奉行所を拡大し、全国の藩から注文を受けるようにしました。当時の織田や豊臣などの大名はみんな唐物好みでしたから、琉球の漆器を中国製として売るために、絵描きや職人を中国に派遣して中国流のやり方を取り入れさせたんです。

　だから、この時代から模様も山水だとか儒教や仏教のものなど、中国的なものになります。それと、向こうは気候の関係であまり綺麗な赤が出ないので、結局、黒が多くなってきます。模様も一つひとつに意味がないといけないということで、山水模様にしても山の彼方にあるという理想郷・蓬莱島や、花も最も高貴とされていた牡丹が多くなってきます。動物も龍や鳳凰など空想のものが多くなって、漆器を入れる箱にも中国名と年号を中国語で記しましたから、大和の大名は全部唐物と思って喜んで買ったんです。

[まえだ　こういん]1936年沖縄県大宜味村生まれ。琉球大学文理学部卒。大学卒業後、（株）紅房にデザイナーとして入社。1962年に沖縄で初の漆芸個展を開催。1968年に独立し前田漆芸アトリエを開設。以後、沖縄県の工芸文化関係の要職を歴任。1988年、首里城正殿実施設計専門委員となり首里城正殿御差床をはじめ各城門の扁額、国王玉座（朱漆螺鈿）などを復元制作。1991年、沖縄県指定無形文化財保持者に認定される。1992年、通商産業大臣より「工芸教育功労賞」を受賞。2005年浦添市美術館館長に就任。

首里城正殿は世界最大級の漆の器

琉球は九〇〇年頃からグスク時代に入りますが、それ以前に琉球列島には夜光貝を採る中国の集団がいたことが分かっています。全部工芸品に使っていたんです。自然のものですからタダで手に入ります。工芸は材料がなくなると技術もなくなって滅びていくしかないわけで、材料が無限にないといけないんです。幸いにも琉球列島の夜光貝は世界で一番綺麗な色をしていて、真珠層も厚くて長く持つんです。浦添美術館には五百年前のものがありますがほとんど変化がありません。平成八年頃でしたか、テレビで紫禁城にある琉球漆器が初めて放映されて大騒ぎになりました。欧米の美術館や博物館にも素晴らしいものがありますが、紫禁城にあるものは全然桁が違います。

その後、琉球は明治十二年に沖縄県になって日本の一部になりますが、明治十五年くらいから大阪や鹿児島からたくさんの商人が入ってきて、沖縄の漆器の朱色は素晴らしいということで全部朱色になります。模様も沖縄の植物や風物をあしらうようになりました。

沖縄の漆器の朱色は、沖縄の気候、自然が作り出している沖縄ならではのものです。漆は木から採ったときはミルク色です。空気に触れると茶色になって徐々に黒くなっていきます。その黒に赤い顔料を混ぜてやると茶色になりますが、沖縄は紫外線が強いから黒になる漆が透明になるのが早いんです。二、三ヶ月でそうなります。そうすると赤い顔料だけが見えてきて明るい色になるんです。漆は湿度八〇%、気温二〇度でないとうまく乾きません。高温多湿、強い太陽光線、沖縄には漆に適した三つの条件があるんです。それと、沖縄の漆器の朱色というのは実は料理とも関係があります。琉球料理は中国風で揚げ物中心です。和食みたいに生の葉を置くと、緑とハレーションを起こして毒々しく見えるんです。それで、本土ではちょっと黄色っぽいものを使っています。

首里城みたいに、あれだけ大きいものが造れるというのは、やはり、この三つの条件があるからです。紫禁城も漆塗りといわれていますが本物の漆ではありません、一部だけです。あのような乾燥地では漆がうまく乾きません。大和でも雨季の短期間しか作れません。復元するのに長い時間がかかります。その点、沖縄は毎日作れます。首里城の正殿は、赤瓦の蓋をかぶせた大きな器、世界最大級の漆の器です。建物だけじゃなく、中で使う道具もほとんど漆塗りでした。琉球は正に漆文化の国だったと言えるのではないでしょうか。

奉神門（ほうしんもん）の扁額。
首里城正殿のある「御庭」へ入る
最後の門に掲げられている。

絵は覚えてないないけど器は覚えている

――沖縄の漆器はいつごろから始まったのでしょうか。

前田　技術は中国からでしょうが、一番古いもので確認されているのが一二〇〇年代、英祖王の骨を入れる木棺が全部漆塗りだったといわれています。琉球は一四二九年に三山が統一されて琉球王国になりますが、統一の前の年に、中国の皇帝が琉球に行って漆の液を買ってこい」と、青磁八千個を持って買いに来ています。なぜ、わざわざ漆を買いに来たのか。琉球の漆器が素晴らしいからで、材料がいいと思ったんでしょうね。

それから、一四〇〇年代から一五〇〇年代にかけては沈金（ちんきん）がピークになりますが、一六〇〇年代に入って衰退します。絵描きが下絵を描いて、彫る人がいて、筆で描いたような絵になるんですが、薩摩が注文するようになって個性的な絵が認められなくなります。それで、誰が彫っても同じになるような一本調子の線になってしまいます。本土のものは全体を絵で飾って見せるような感じがありますが、琉球漆器の絵は器を飾るための模様なんです。

例えば、漆器をパッと見せて暫く隠して質問すると、本土のものはどのような器だったのかが思い出せない。絵だけをよく覚えている。琉球のものは絵は覚えていないけど器は覚えている。これが本当の工芸じゃないかと。着物と一緒で人間が大事。工芸の本質もそこにあるんじゃないかと思います。

漆器はこのように時代時代によって変わってきました。染織物は琉球国内に目が向けられていましたが、漆器は中国や江戸への献上品として外国に目が向けられていましたので、漆器の歴史を見ると沖縄の歴史が分かります。

金龍五色之雲の模様と色が
配された首里城正殿の柱

首里城正殿の前に立つ前田孝允氏

漆器から漆芸に

――作家になられた理由をお聞かせください。

前田　大学卒業と同時に漆器会社にデザイナーとして入ったんです。デザイナーですから、葉っぱがあと一枚あれば絵が安定すると思っても、単価に影響するから取れということがあるわけです。商売としてはいいんですが、作品としてはどうしても納得できない。そういうことがあって、会社を辞めたんです。

作家になったのは、やはり一人でも良いものを作る人がいなければ、という思いですね。それと、もう一つの理由に螺鈿がありました。昔の琉球には螺鈿の研ぎ出しの技術がなかったというので文献を調べると、研ぎ出しの材料がたくさん出てきたんです。これは会社ではなかなかできません。個人作家としてならできると、一つの義務みたいなものですね。

それで、個展を繰り返していた三十代の始めの頃、「買いたいけど子どもが傷つけてしまうのが怖い」と言うので、傷がつかないものを作ろうと思って額物に挑戦したんです。それで、沖展に初めて堆錦の踊りの絵を大きなパネルにして出展したら、「これは漆器じゃなくて絵だ」と言われまして、「漆器は器だけど、漆はパネルにしたり建築に利用できたり幅広い用途がある、漆器を発展させるためにも漆芸にして欲しい」と言ったら、みんなすぐに了解してくれました。そしたら、陶器の人たちも、陶芸にして欲しいと（笑）。これも作家だったからできたことだと思います。

苦労した金龍五色之雲

――首里城の復元では、どのようなことが印象に残っていますか。

前田　基本設計以前に予備調査を立ち上げて、いろんな参考資料を収集していくなかで、首里城が漆塗りということが分かったんです。それで、予備設計の段階から参加して欲しいと言われて「首里城復元実施設計委員会」に入ったわけです。委員会は建築、瓦、彫刻、彩色の4部門がありましたが、最後まで時間がかかったのが彩色でした。色の決定が難しかったですね。朱塗りだったのか、黒塗りだったのか、壁や柱はどういう色だったのかという、写真も資料もないので一切分からないんです。それで中国、韓国、鹿児島、京都などに調査に行きました。特に、みんなが気にしていたのが「金龍五色之雲」の色でした。

龍は金だろうと想像がつきますが、五色之雲が何色なのかが分からない。それで、いろいろ調査したり、資料を集めたりしたんですが、それでも五色が分からない。最後の手段ということで県立博物館の蔵の中を調査したんです。そうしたら、昔の円覚寺の扉と額木が見つかって、「青、緑、朱、白、黄」の五色であることが分かったんです。この五色は古代仏教、チベットあたりでは今でも使われています。何を意味するかというと空、水、火、雲、大地、この五色は全宇宙を表現しているんです。

それから、首里城のデザインは誰がするかということになって、委員の中で絵を描くのは僕と名渡山愛嬢さんの二人しかいなくて、漆器の仕事だからお前がやれと。それで、一番大事なのは御差床（うさすか）ということで五分の一の模型を作って、柱の模様や色などの検討を重ねていきました。壁や柱の色にも苦労しました。見聞録[※1]にも書かれていないんです。明治前後に描かれた鳥瞰図なども全部取り寄せて見ましたが、柱は全部黒で描かれているんです。それで最初のうちは黒を使っていましたが、「見聞録は当然のもの、どこでもやっているようなものは、いちいち書かないんじゃないか」と。そうであれば、壁とか柱は中国や韓国のように全部ベンガラ[※2]色ではないかということになったんです。それと、首里城の一階はかつて織物の女学校があって、当時、女学校の生徒だった首里織の宮平初子先生などからも証言を得てベンガラ色に落ち着いたわけです。

――最後に、今後、首里城に期待することなどがありましたらお聞かせください。

前田　建物なので修復、復元が必要になります。問題はその職人が少ないことです。修復、復元は永久に続くものですから、沖縄の人たちで何とかできるようにしていかないといけない。漆芸だけでなく宮大工、瓦職人、彫刻など全てです。これをぜひ海洋博財団で何とかしてもらいたいと思います。今、壁を塗っている人たちは、幸いに二十代から五十代までの方達ですが、十年代越しにいないとダメになります。二十年を越すと感覚が違ってきます。ですから、十年越しの職人を育ててほしい。これはぜひともお願いしたいですね。

それと、これは海洋博財団とは直接関係ないかもしれませんが、県立芸大に漆芸学科を設置してもらいたいと思っています。漆については無くなっている技法が結構あるんです。今、箔絵をやる人がほとんどいなくなっています。首里城の扁額をはじめ御差床などは全部箔絵なんです。こういうものは学校で基礎からしっかり教えないとできません。首里城を守るためにもぜひ検討していただきたいと思っています。

（平成二十年八月十二日、前田漆芸アトリエにて）

※1.見聞録
『琉球見聞録』。喜舎場朝賢著。1914年（大正3）に親泊朝擢によって刊行される。1875年の琉球処分官・松田道之の来島から1879年に沖縄県を置くまでの、政府と首里王府の折衝と経過が沖縄側からの立場で記録されている。全四巻。

※2.ベンガラ色
帯黄赤色の無機性の顔料で、化学成分は酸化第二鉄。土器や塗輪の彩色などに古くから使われていた。インドのベンガル地方に産することから弁柄があてられていたが紅殻とも書く。

島の風土が育んだ独特の柄と色合い

与那国織

我が国の最西端に位置する与那国島には、ドゥタティ(労働着)など古くから伝わる独特の織物がある。ドゥタティとはどんな織物なのか、与那国織の普及と継承に力を注いでいる与那国伝統工芸館を訪ね、与那国織の現場を見せてもらった。

取材協力：与那国町伝統織物協同組合

与那国織の反物

種類豊富な与那国織

石垣空港から飛行機で約三十分。日本の最西端、黒潮が最初に出会う島、世界最大の蛾〝ヨナグニサン〟の生息地など〝最〟の多い島である。その与那国には、五百年の長い歴史を持つ与那国織がある。

一四七七年、与那国に漂着した三人の朝鮮人の見聞記を収録した『李朝実録』には、与那国の織物について次のようなことが記載されている。

「木綿も絹も使われておらず、苧で布を織っている」

「染料は藍が使われている」

右）落ち着いた花柄が可憐な与那国花織
中）ドゥタティとカガンヌブー
左下）愛らしいドゥタティの幼児着

その記述から、当時の与那国では苧麻から糸を取って布を織っていたことが分かる。その苧麻は自生していたものである。苧麻は今も使われているが、栽培している人は少なく、現在はほとんど他所から購入している。

与那国伝統工芸館（与那国町伝統織物協同組合）では、十人ほどの女性たちが織物に精を出していた。与那国の織物は与那国織と一般に言われるが、「与那国ドゥタティ」「与那国花織」「与那国シタディ」「与那国カガンヌブー」などの種類がある。工芸館は織子の育成の場にもなっており、最初の六ヶ月間は木綿を織り、その後、いろいろな織りに挑戦していくのだという。一人前の織子になるには早い人でも二年はかかるとのこと。

工芸館近くに住む長老格の崎原キヨさん（八四歳）を訪ねると、イチチンバナ（五つの花）の花織を織っていた。与那国花織は着尺（きじゃく）※に使う花織と、シタディ（手ぬぐい）に使う花織では織り方が異なる。着尺の場合には表に緯糸が浮き、裏に経糸が浮いている。シタディに使う板花織の場合には、表も裏も緯糸が浮いている。表と裏に交互に同じ色の糸が出るので、一見すると布の表裏の見分けがつかない。シタディにだけ使われる織り方である。

七色の糸が織り込まれているシタディ

織物を守るのは女性たちの力

織物の質をもっと高めていきたいと語る与那国町伝統織物協同組合理事長の角田麗子さん。

織物に込められた女性たちの思い

ドゥタティは苧麻で織られる男たちの労働着である。シタディは沖縄本島でいうティサージ（手ぬぐい）のことで、与那国の女性はカジキ漁に出る男に心を込めて織ったシタディを贈り、その男が無事に帰ってくるのを祈った。協同組合の角田理事長の説明によると、「花織ティサージ（板花シタディ）には、五つの格子模様を並べて織り、その柄を七つの筋に織り込み、両端にも同じ柄を織り込んでいます。この織り方の意味は、五つの格子柄は〝イチンカワラン（いつまでも変らない）〟であり、七つの筋は〝何事ん（なにごとも）〟、両端の九つの柄は〝この願いが叶えられる〟」とのことである。

「織物は楽しい」と語る崎原キヨさん。

このシタディは与那国民謡の「スンカニ」でも歌われている。

いた花したでに（板花シタディに）
まぐくるくみて（真心をこめて）
ういはる、なさぎや（織ることは、情けである）
いちも、いちまでん（いつのいつまでも）

黒潮が押し寄せる与那国は、古くからカジキマグロ漁が盛んである。船の先に両足で踏ん張ってモリを持ち、荒海に獲物を求めていく。波に激しく揺られて立ち続けるのは容易ではない。夫が、愛する人が漁から無事に帰ってくることを願う女性の気持ちが歌われているのだ。

カガンヌブーというのは、余所では「ミンサー」と呼ばれるものである。藍に白の絣模様が入った細い帯だ。絣は夫婦絣と言われ、短冊模様に二つ対になった模様を少しずらして織っている。その図柄は男と女の親密な間柄を示しているといわれている。

与那国織の糸に使う染料は、主に島に自生している植物が使われる。黄色はフクギ、ピンクはシャリンバイや月桃、ガジュマル、タブノキなどである。藍だけは、現在、本部町伊豆味から購入しているという。

角田理事長は「着尺が評判を得ているので、織物の質をもっと高めていきたい。与那国織は祭りや行事にはなくてはならないもので、最近は〝かりゆしウェア〟として町長さんをはじめ町民の皆さんにも愛用されるなど、生活に結びついてきています。島外にも広く販路を拡大していきたいですね」と意欲を燃やしている。

与那国伝統工芸館

※着尺（きじゃく）大人の着物を一枚仕上げるための反物

シリーズ 沖縄の大木②

ガジュマル

和名：ガジュマル
科名：クワ科
学名：*Ficus microcarpa* L.f.

沖縄県八重瀬町の世名城（よなぐすく）の集落に「日本最大級のガジュマル」と称されるクワ科のガジュマルが悠然と構える。日本では屋久島、種子島、琉球列島に自生し、沖縄では主に石灰岩地帯に生育する。樹木は街路樹、防風林、防潮樹、生垣、学校などのシンボル、御神木として、材は薪や細工物、燃やした灰は灰汁の上澄み液を沖縄ソバの麺の製造に利用される。古木には「キジムナー」と呼ばれる木の精霊が宿るという伝承がある等、人との関わりが深い。

この木の推定樹齢は250年、幹周り23・5m、樹高10m（八重瀬町指定天然記念物）。とくに幹周りに関しては日本の全樹種のなかでも3位になるという。地元では「世名城のガジュマル」と呼ばれ地域のシンボルとして親しまれている。ガジュマルの特徴は、「気根」という根を幹や枝から垂らし、それが地面について生長すると元の幹との区別がつかなくなり、遂には古い幹が枯れ、気根が太くなり新しい幹となる。世名城のガジュマルは、多くの年月をかけ、幹のように太く生長した数百本の気根が集まったものである。

この巨樹の周辺は、琉球王国時代から聖域（沖縄では「御嶽（うたき）」と呼ばれる）として崇められてきた。長い時を経て人と共に生きてきたこの木は、今も尚、世名城集落の老人会をはじめ地元の人々によって大切に守られている。

※沖縄本島で最も有名な名護市のヒンプンガジュマルは、樹高が19m、幹周りが10mで推定樹齢が280～300年と言われています。

シリーズ 沖縄の希少動植物②

植物

嘉津宇岳に名が由来
カツウダケエビネ

和名：カツウダケエビネ
科名：ラン科
学名：*Calanthe discolor* Lindl. f. *kanashiroi* (Fukuyama) K. Nakajima
レッドデータカテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（沖縄県）、絶滅危惧Ⅱ類（環境省）

本種は、沖縄本島北部の山地、石灰岩地の自然林の林床に生育する自生ランです。沖縄島の固有種で、名前は北部の嘉津宇岳に由来します。

常緑の多年草で、長さ20cm前後の葉を2～5枚つけます。花茎は長さ30cm程に直立し、芳香がある花を十数個つけます。

かつて自生地では群生する状態もみられていましたが、近年乱獲により激減し、現在ではほとんどみることがなくなりました。

動物

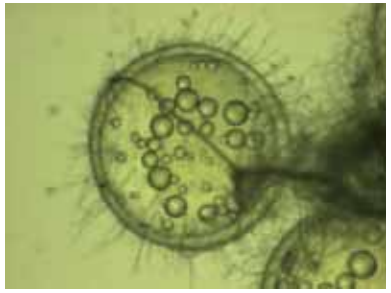
全国的に絶滅が危惧されている
メダカ

和名：メダカ
科名：メダカ科
学名：*Oryzias latipes*
レッドデータカテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（沖縄県）、絶滅危惧Ⅱ類（環境省）

日本全国に生息している最も有名な魚の一つです。国内のメダカの中には、遺伝的に異なる複数の型が存在します。沖縄県のメダカは琉球型とされますが、水田や湿地、池など本来の生息場所が減少し、絶滅が心配されています。

また、遺伝的に異なるメダカの放流も行われているようですが、放流する際は産地の確認や専門家に問い合わせるなど細心の注意が必要です。

飼育水槽では、朝方腹部に卵をぶらさげている雌を見ることができます。



メダカの卵はマグロの卵、直径1mmに比べ、1.5mmと体長の割に大きく、水草などに卵をからみつかせるための付着糸がある。

腹部に卵をぶらさげている雌メダカ

与那国の猫小

まやーぐわー

昔、与那国の祖納村に、大川加仁と言う百姓がいました。ある日、加仁は宇良部岳の麓に薪を取りに行きました。薪を一生懸命、拾い集めていると、異様な猫の鳴き声が聞こえてきました。「何だろう」とその鳴き声のする方へ行ってみると、椰子蟹に尻尾をはさまれた猫が、朽ちた木の蔭から出て来るのが見えました。これは痛そうだと思って、加仁は自分が使っている山鉈で、椰子蟹の大きな爪を切って猫を助けました。助けられた猫は、加仁が薪を拾い終わるまでミャーミャー鳴きながら、そばを離れませんでした。加仁はこのまま放っておくのはかわいそうだと思い家に連れ帰って大切に育てました。

そのうちに元気になった猫は加仁の家の鼠はもちろん、畑にも一緒に付いて行って、田や畑の鼠も全部捕って退治しました。他の人の田畑は不作になっても、加仁の田畑の作物だけはいつも豊作でした。その猫のことは村中はおろか、八重山の役人の耳にまで聞えていました。

そのころ琉球王府では、福木で蔵を造り、そこに上納米を仕舞っていました。しかし、その蔵にはたくさんの鼠がはびこって、王府の財政にも支障をきたす程になっていました。鼠を捕まえるために猫を蔵に入れるのですが、どの猫も鼠の大群にやられて、しょぼしょぼ戻ってくる有り様でした。そこで、王府は、「これらの鼠を退治出来た者には、存分の褒美をやる。」とお触れを出しました。このお触れを知った八重山の役人は、与那国の猫のことを聞いていたものですから、その猫のことを言上しました。「それでは、その猫の持ち主と猫を一緒に王府へよこしなさい。」と言うことで加仁は、猫を連れて、役人に伴われ王府へ行きました。

その加仁の猫を蔵の中に放したら、たくさんいた鼠を片っ端からやっつけて、全部たいらげてしまいました。これには、王様も大喜びで、加仁に、「おまえには親雲上の位を授けよう。その代わりこの猫はここに置いて帰りなさい。」と言われました。加仁は、猫のお蔭で、親雲上の位を授けてもらったのですが、「おまえと別れるのも辛いけれど仕方ない。おまえは王様の役に立ちなさい。」と言葉をかけて泣く泣く帰りの船に乗りました。

その船が、八重山に着く頃、猫のニャアという鳴き声が聞こえてきました。なんと加仁のその猫は、いつの間にか船に乗っていて、船倉の荷物の間から首を出していたのです。その猫がどうやって乗ったかは誰も分かりません。それで、親雲上になった加仁は、猫を一緒に連れて与那国に帰ってきたので、島の人から大歓迎を受けたそうです。

そのお祝いをあげた時に加仁が嬉しさの余り、自分のこの喜びの気持ちを即興で歌ったのが、与那国民謡として有名な「与那国の猫小」だそうです。

資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

オキちゃん劇場

イルカのオキちゃんの名前に因んだ「オキちゃん劇場」は、1975年の沖縄国際海洋博覧会開催当初からの施設で、オキちゃんとその仲間たちが繰り広げるショーは、海洋博公園を代表するアトラクションになっています。「オキちゃん劇場」では、楽しいショーを見て頂けるように、日々、イルカたちの調教や健康管理に努めています。

オキちゃん劇場

スタッフ8名、イルカ6頭

ここ「オキちゃん劇場」は、長い歴史があり全国的にも知名度の高い施設となっています。

現在、「オキちゃん劇場」には、4種類6頭（ミナミバンドウイルカ1頭、オキゴンドウ3頭、カマイルカ1頭、バンドウイルカ1頭）のイルカがおり、外間克也主任技師をリーダーに7名のスタッフで運営管理を行っています。

海獣課が管理する施設としては「オキちゃん劇場」のほか「イルカラグーン」、「ウミガメ館」、「マナティー館」があります。

ショーの前にイルカの健康状態を確認したオキちゃん劇場のスタッフ

ショーを中心とした日常業務

「オキちゃん劇場」のスタッフは、夏期は1日5回、その他の期間は1日4回のショーを中心に動いています。朝8時半からのスタッフミーティングのあと、ショーに向けて餌の準備や清掃作業を行います。ショーは1回につき約15分間で、その合間を利用してイルカショーのトレーニングを行ったり、体調不良のイルカの治療を行ったりします。また、水槽の掃除や海水の管理も重要な業務で、「オキちゃん劇場」は3日おきにプール清掃を行います。水槽は1,200トンの容積があり、排水に45分前後、満水になるのに2時間かかるといいます。海水は「沖縄美ら海水族館」の黒潮の海の排水を利用しています。

水槽の海水の入れ替え作業

ショーはチームワークが大切

人気者のオキゴンドウの「ゴンちゃん」

イルカの健康管理

スタッフが最も気を使うのは、やはりイルカの健康管理です。毎朝、体温を測り、摂餌や行動に異常がないかを確認し、異常があれば血液検査などを行います。餌はシシャモ、サバ、トビウオ、ホッケなどですが、ヒレがトゲとなる魚は喉を傷つけないようにヒレを落とします。1日の給餌量は体重の5～7%を目安にしているとのこと。また、餌の食べ方についても注意を払い、調子の良し悪しを判断します。体重についても、3ヶ月ごとに測定して体重の増減をチェックします。

食べやすいようにヒレをカット

イルカごとに餌を振り分け

健康管理のための採血

イルカのトレーニング

ショーで活躍するイルカについては、半年～1年間調教してデビューさせるとのことですが、プール内で生まれた仔イルカは親の真似をして生後1年足らずで演技を覚えることもあります。イルカの寿命は50年～60年といわれているそうです。現在も活躍しているオキちゃんは、沖縄国際海洋博覧会のために奄美大島から来たメスのミナミバンドウイルカで、推定年齢36歳。30年余り現役でショーをしているのは、おそらく日本ではオキちゃんだけだと言われています。イルカは一頭一頭に性格の違いがあり、常日頃から細やかに観察して動きや性格等を見極めることが大切だと言います。「確かに覚えが早いイルカ、遅いイルカというのはありますが、それは教える側の人間にもよります」と外間主任技師。パフォーマンスの良し悪しもトレーナーの力量によるとのこと。新しい演技の訓練はショーの合間に1日3～5回、1回につき5分程度行います。

餌を与えながら様子を観察

イルカの繁殖

「オキちゃん劇場」も30年を超え2代目が活躍し始めています。1999年の4月に生まれ、2000年の沖縄サミットに因んで名づけられた「サミ」はオキちゃんの最初の子供です。オキちゃんは2004年に2頭目も出産しましたが、残念ながら1年で死亡してしまいました。「オキちゃん劇場」では、そのほか、3頭のイルカが誕生しているとのことです。

ミナミバンドウイルカの繁殖で繁殖賞
（日本動物園水族館協会）を受賞

トレーニングの様子

レベルの維持と調教基準

スタッフが常に心掛けていることは、まずは日頃の演技レベルの維持ですが、レベル維持は一人ではなかなか難しく、やはりチームワークが大切だと言います。何よりもスタッフが同じ基準で調教することが重要とのこと。「最近は動物飼育の専門学校などがあり、ショーを見てトレーナーになりたいと憧れてくる人もいますが理想と現実の違いがあります。イルカトレーナーへの憧れだけでは長続きしません。動物飼育の仕事は、ただそれだけじゃないですからね」と外間主任技師。現在、新しい「イルカプール」の建設が進んでおり、スタッフのなお一層のチームワークが期待されています。

7名のスタッフをまとめる外間主任技師

オキちゃん劇場

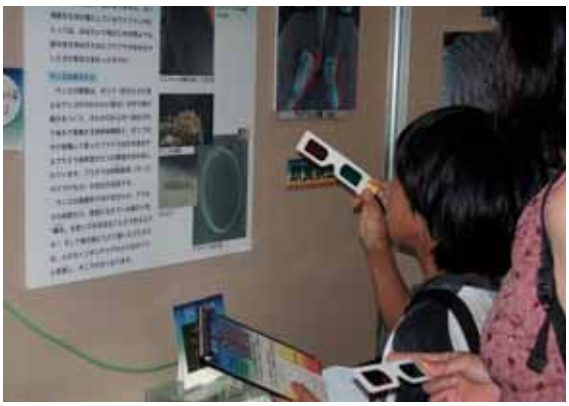
海洋博公園内施設、沖縄美ら海水族館から徒歩5分、入場無料

ショータイム約15分

11：00　13：00
14：30　16：00
18：00
（3～9月のみ）

亜熱帯性動植物に関する調査研究・普及啓発事業

平成20年度夏休み特別企画「ビックリ！電子の目 ―電子顕微鏡で見る沖縄の生き物たち―」の開催



今夏、沖縄美ら海水族館では「ビックリ！電子の目 ―電子顕微鏡で見る沖縄の生き物たち―」と題し、電子顕微鏡を活用した企画展を開催しました。当館では普段、生物の調査・研究のために「走査型電子顕微鏡」を活用しています。今回は、この電子顕微鏡で見たミクロの世界を一般の皆様にもご紹介することで、生物の魅力や不思議を再認識していただきたいという思いから当展を実施しました。会場となった当館イベントホールでは、沖縄の海にすむ生物や植物を鮮明な電子顕微鏡写真でご紹介。身近な昆虫からサメのウロコ、植物の花粉など、様々な生物の拡大画像数十点の他、標本や生体の展示を行いました。更に今回の企画展では、お客様にミクロの世界をより実感していただくため、写真を立体視できるように加工して展示。赤青メガネでのぞくと飛び出して見える生物の写真に、子供から大人まで興味津々。あらゆる生き物の意外な一面や個性的な姿に「ビックリ！」なご様子でした。

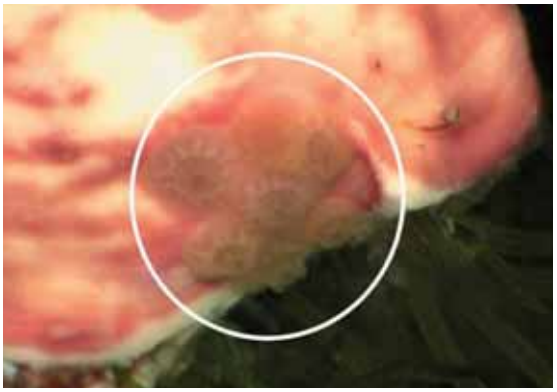
サンゴの有性生殖

沖縄美ら海水族館では、旧水族館時代から20年以上にわたりサンゴの飼育を行っています。現在、トゲスギミドリイシ等およそ３０００群体を飼育しています。サンゴは動物の仲間で、無性・有性生殖で繁殖し、ミドリイシの仲間は、１年に１回、６月の夜に卵と精子を水中に放出して受精する（放卵放精）有性生殖を行っています。水族館でも、１９９８年から毎年、水槽内のトゲスギミドリイシの放卵放精を確認しています。

この、10年以上飼育したサンゴ群体から得られた卵についての調査研究は、２００６年から実施しています。

その結果、飼育群体の卵母細胞（卵の元になる細胞）が野外群体より２倍近く大きく、卵の数も飼育・野生群体とも差がなく、また野外群体と水族館群体の交配実験では、幼生は野外群体よりも飼育群体のほうが活発に泳ぐ期間が長かった事などが確認されました。

これらの事から、当館で継続飼育されたトゲスギミドリイシは、野生群体と比較しても、正常な卵や幼生を作っている事が明らかになりました。今後も、水族館の特徴をいかした、サンゴの増養殖や生物・生態的な研究を行っていきます。



岩に定着したサンゴの幼ポリプ

サンゴの産卵

イルカの疾病治療に関する研究

飼育動物を健康な状態で飼育するには、適切な飼育環境の保持と徹底した飼育管理を行うことが大切です。飼育係は、動物の生態や生理に関して正確な知識を持ち、細やかな観察により、異常を早期に発見する必要があります。毎日行う観察には、接近摂餌状態、一般動作や個体間の関係、排便、ガス、分泌物、体表の状態などの視覚的観察、呼吸音や呼吸臭、熱感の確認などがあります。

異常が認められれば、体温測定、血液検査などを実施し、状況に応じて超音波、X線、内視鏡などの諸検査を行います。このような検査にあたっては、動物に受診動作の訓練を行う事により、検査時の動物の負担の軽減を図ることが出来ます。

当館におけるイルカの疾病は、細菌や真菌による感染症が最も多いことから、治療に当たっては、細菌及び真菌学的検査により起因菌を確定し、適切な投薬治療に努めています。また、腎及び肝機能等の検査値は、飼育個体の年令や飼育期間により違いが見られることから、定期的に検査を行い、各個体の正常値の把握に努めています。

当財団では、イルカについての感染症、消化器疾患等の適切な疾病検査・治療技術等の確立を目的に調査研究を実施するとともに、医療検査機関との共同研究を進めています。

検温は肛門からプローブを15～20ｃｍ程度挿入し、直腸内の温度を測ります。
平熱は個体によって差があり、35.5～37℃前半程度です。

イルカの採血は尾びれにある血管から行います。サインを出すとイルカは体を横にして尾びれを保定させ、採血が終わるまでじっとしているようにトレーニングされています。

イルカ学習会

より多くの方に海洋生物の生態について理解し、興味を持って頂けるよう、平成19年度から鯨類について学ぶ「イルカ学習会」を年3回実施しています。実施にあたっては、クイズやゲームなどを交え、楽しく学習出来る内容作りに努めています。

19年度夏期の学習会では、水中生活に適応した鯨類の体の構造について解説を行いました。流線型の体型の有効性、人工尾びれ開発や遊泳速度解析から分かったイルカの尾びれの仕組みなどについて、参加者と一緒に簡単な実験などを行いました。冬期は、鯨類の形態や生態、水族館での飼育管理等を紹介したパネル展示や、クイズラリーなどを実施しました。春季は沖縄近海を回遊するザトウクジラの生態や回遊経路等を解説したパネル展示とクロスワードクイズを実施しました。

20年度夏期は、イルカのトレーニング方法を通して、イルカの持つ身体能力や知能、学習能力等について解説しました。新規搬入個体の馴知の経過を紹介した映像や、実演を交えたトレーニング方法の紹介などは参加者にも好評で、興味を持って頂けました。

今後の学習会では、映像や模型を活用するなど、より分かりやすい解説展示の工夫に努め、楽しく学習出来るよう企画内容の充実を図っていきます。

スライドや映像を使用しての解説

参加者による簡単なトレーニングの体験も行いました。

マングローブ調査

「海のゆりかご」あるいは「海の森」とも称されるマングローブは、海水と淡水の混ざり合う汽水域に生育する植物種を総称しています。そこは、植物のみならず野鳥、甲殻類、貝類、魚類など生物種の多い場所であり、近年では、１９９９年に漫湖公園、２００５年に名蔵アンパルの湿地がラムサール条約に登録されるなどマングローブ生態系の重要性が認知されて来ました。

当財団では、これまで、独自調査及び受託調査によって国内外のマングローブ自生地及び植栽地の生育状況や環境、また利用状況等を調査してきました。

国内に自生するマングローブは鹿児島県から南の西表島までの間、メヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギモドキ、ヒルギダマシ、マヤプシギ、ニッパヤシと南下するにつれて種数を増やしています。さらに南下し、東南アジアでは、マングローブ林の中に集落があり、マングローブと生活を共にしている地域もあります。またミクロネシアなどの太平洋諸島では、遥かリーフ上にマングローブの自生がみられる場所もあります。それぞれの地域で多様な生態系を持ち、さらに多様な利用が見られます。

マングローブは、地球温暖化対策や生物多様性の保全に寄与できるだけでなく、教育、観光、レクリエーション、都市緑化など幅広い面で活用できる重要な資源であり、今後とも調査および普及啓発を継続したいと考えています。

植栽から11年が経過したヤエヤマヒルギ

自生地の生育状況調査（奄美大島住用川）

ブーゲンビレアの優良品種導入について

ブーゲンビレアは熱帯の代表的な花木であり、南国沖縄を象徴する植物でもあります。もとは南米に分布するオシロイバナ科イカダカズラ属のつる性低木で、沖縄へは明治時代に入ってきたとされています。

現在では、苞の色や形、斑入りなどバラエティーに富んだ品種が数多く作出されており、街路樹や壁面緑化としての利用や、市町村のシンボル花として制定されるなど、沖縄を代表する花木として人気があります。

当財団では、亜熱帯性植物の実用化に向けてブーゲンビレアの優良品種の導入を行うとともに、肥培管理と効果的な展示方法の検討を行っています。平成19年度に導入した品種から特徴的なものを紹介します。〝メリーパーマー・ティンマ〟は赤と白の花（苞）が同時に咲く、いわゆる「咲き分け品種」と呼ばれるもので、葉の中央には黄色の斑が入り、花のない時期でも美しい葉を楽しめます。〝マヨイ〟は白色に淡いピンクのグラデーションが入る珍しい花色で、今後普及が期待されます。

展示方法では、１本の樹に数種類を接木し同時に数種の花を咲かせる方法や、菊花のような懸崖（けんがい）作りなど、様々な仕立て方により効果的な展示が可能です。

今後もブーゲンビレアの優良品種を積極的に導入し、展示会等を通して熱帯・亜熱帯性植物の普及啓発を続けていきます。

‘メリーパーマー・ティンマ’

‘マヨイ’

首里城に関する調査研究・普及啓発事業

飛躍的な発展をとげる琉中関係史研究の立役者！

清代中琉関係档案選編シリーズの出版

当財団は、平成６年度より北京故宮博物院内の中国第一歴史档案館（档案館は公文書館に相当する施設）に所蔵されている膨大な清朝期（１６４４～１９１２）の档案（公文書）から琉球関係記録を抜き出し、整理・出版を行う「清代中琉関係档案選編」の出版事業を進めています。

本事業は、「おきぎんふるさと振興基金助成事業」の支援を受けた福建師範大学の歴史系中外関係史グループが、平成３年度より選編・続編の２集の史料集を刊行したのが始まりで、第三編以降の史料集の刊行に関しては、当財団が同グループへ助成を行い、第六編までを発行し、現在第七編の調査・整理を行っているところです。

本史料集は、中国（当時は清朝）国内の役所が、中国を訪れた琉球使節にどのような対応をしていたのかなどの具体的な記録が残る基礎史料で、90年代より日中双方の研究者間で琉中関係史の研究が飛躍的に発展した要因の一つとなりました。

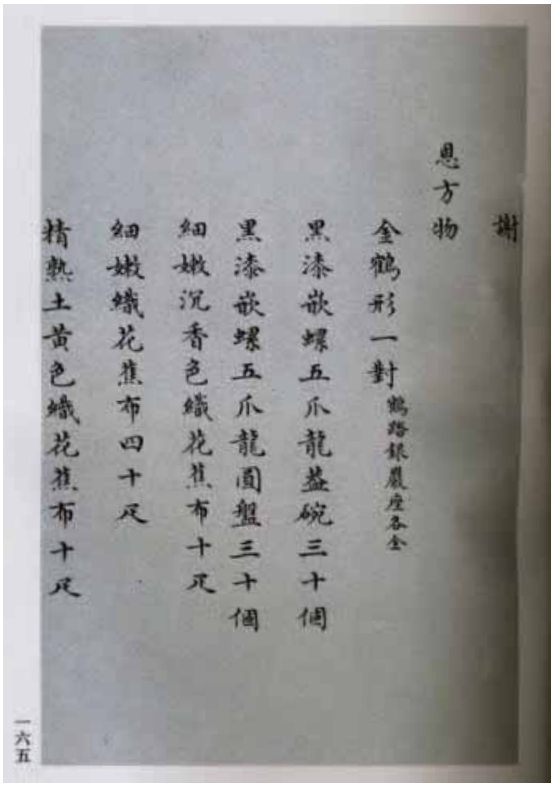
第三編は、清朝の各役所（外交・教育・地方役所など多岐にわたる）より内務府（清朝の宮廷事務を統括する役所）に集まる琉球使節団、留学生の滞在費用や対応に関する報告を採録したものとなっています。第四編は、内閣という政務機関に残された「史書」という公文書群で、第五編も内閣の「起居注」という皇帝の言動などを記録した公文書群です。第六編は内務府内で琉球使節団に対応した公文書群です。第四～六編にも琉球使節団の滞在に関するものや、献上した物品（銅・錫・漆器・織物など）の受け取りに関する記録などが残っています。

琉球使節団と直に接していた中国の各役所が具体的な対応を上部機関や対等機関に報告・連絡・調整を行った記録で、これにより琉球使節団の行動・輸出入した貿易品、琉球国王から献上・皇帝から下賜された具体的な美術工芸品などが判るようになり、この記録を論文・著作に引用した琉中関係史の研究は枚挙にいとまがありません。特に沖縄県が進めている※『歴代宝案』刊行事業では本文の校合作業に非常に有益な史料となっています。

本史料集は、助成事業の成果として２００部が財団に納品され、沖縄県立図書館などの県内外の公共図書館や大学の付属図書館などに配布されています。一般的には公共図書館の郷土資料コーナーなどで閲覧することが可能となっています。

※『歴代宝案』　琉球王国の中国や諸外国関係の外交文書を集成した史料。原本は関東大震災などで失われた。現存する複数の筆写本を校合して史料集復元の膨大な作業を行っている。選編シリーズには『歴代宝案』と同一記録が多数あり、復元に欠かせない記録となっている。

清代中琉関係档案選編　第三編～第六編



第六編に集録されている档案の原文の一部
皇帝へ献上された琉球漆器や芭蕉布等のリストが記されており、北京故宮博物院には記録されている琉球漆器の実物が現存している。

海洋博公園

海洋博公園 10月期～12月期イベント

緑と文化に触れる秋の海洋博公園

暑かった夏の日差しが少し和らいで、沖縄も秋が感じられる季節となりました。

秋の海洋博公園では、ハワイの伝統的な「フラ」をはじめ台湾タオ族タタラ船進水儀式芸能披露、地バーリー披露、苗木の無料配布、沖縄らしい植物を扱った企画展など自然や文化を楽しめる様々なプログラムで、皆さまのご来園をお待ちしております。海洋博公園にぜひお越し下さい。

《無料入館日情報》10/19(日)、10/26(日)は"秋の都市緑化月間"のため熱帯ドリームセンター・海洋文化館が入館無料になります。※沖縄美ら海水族館は有料です。

公園全体で遊ぶ

海洋文化館関連民族芸能披露等

ハワイのフラ、台湾タタラ船関連の民族芸能や泊地バーリーの披露を行います。

※無料入館日
・ハワイアンフラ10/19　・台湾タタラ船10/26　・泊地バーリー10/26

●10月19日(日)・10月26日(日)
●お問い合せ／業務課 業務係(TEL0980-48-2741)

場所 海洋文化館 無料

扇作り体験

おきなわ郷土村地頭代の家にて、沖縄の伝統的なクバの葉を使った扇作りの体験を行ないます。

※1日先着20名
●10月の土・日・祝
●お問い合せ／業務課 業務係(TEL0980-48-2741)

場所 おきなわ郷土村 無料

鬼餅作り体験

おきなわ郷土村でおばぁがやさしく、昔から沖縄で作られてきた鬼餅の作り方を教えてくれます。沖縄の人が鬼餅を食べるようになった由来を紙芝居を交えて楽しく紹介します。

※定員30人程度(要予約)
●11月22日(土)～11月23日(日)
●お問い合せ／業務課 業務係(TEL0980-48-2741)

場所 おきなわ郷土村 無料

アダンによる沖縄玩具作り体験

おきなわ郷土村地頭代の家にて、沖縄で古くから作られていたアダンの葉を使ったおもちゃ作りの体験を行ないます。

※1日先着25名
●12月25日(木)～12月30日(火)
●お問い合せ／業務課 業務係(TEL0980-48-2741)

場所 おきなわ郷土村 無料

生き物とふれあう

書道で楽しむ沖縄の魚たち

通常、カタカナで表記されている展示生物の和名を、表意文字である漢字で表記することで、その名称の由来や意味に新たな発見をし、生物や書道に親しむきっかけを提供します。

●10月10日(金)～10月19日(日)
●お問い合せ／教育普及係(TEL0980-48-2742)

場所 沖縄美ら海水族館 イベントホール 無料

花と緑とふれあう

クロトン展示会

カラフルで変わった形の葉をもつクロトンは、沖縄のガーデニングには欠かせない存在です。色や形が様々な50品種を展示し、活用事例を紹介します。専門家による栽培教室も開催します。

●10月4日(土)～10月26日(日)
●お問い合せ／植物課 公園管理係(TEL0980-48-3624)

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

ハス乗り体験会

人を乗せても沈まない、大きくて不思議な葉っぱオオオニバス。葉っぱに乗って沈まないしくみを体験することができます。

※当日受付／体重20kgまで(レプリカあり)
●10月19日(日)・10月26日(日)
●13:00～16:00
●お問い合せ／植物課 公園管理係(TEL0980-48-3624)

場所 熱帯ドリームセンター 無料

ブーゲンビレア展

200鉢を一堂に展示。ブーゲンビレアの苗のプレゼントや栽培教室などもあります。

●11月1日(土)～11月30日(日)
●お問い合せ／植物課 公園管理係(TEL0980-48-3624)

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

ハイビスカス展

世界のハイビスカスを250品種展示します。苗のプレゼントやハイビスカスティーの無料試飲などもあります。

●12月5日(金)～12月28日(日)
●お問い合せ／植物課 公園管理係(TEL0980-48-3624)

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

植物のクラフト作り

10月 押し花のストラップ、にょろにょろヘビを作ろう
11月 ミニタペストリー、ミニクリスマスツリー作り
12月 ミニクリスマスツリー作り、お正月飾りを作ろう

※10名以上は要予約
●10月1日(水)～12月31日(水)
●8:30～17:30
●お問い合せ／熱帯・亜熱帯都市緑化植物園(TEL0980-48-3782)

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料

苗木無料配布

秋の都市緑化推進運動にちなみ緑豊かな街づくりを推進するため、苗木の無料配布を実施します。
配布予定苗木:クミスクチン、コリウス、コウシュンカズラ、マツリカ、フウリンブッソウゲ他

●10月1日(水)～10月31日(金)
●8:30～
※1日100鉢　無くなり次第終了します。

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料

●10月12日(日)・10月19日(日)・10月26日(日)
●13:30～
※1日1000鉢　無くなり次第終了します。

場所 中央ゲート噴水広場 無料

●お問い合せ／熱帯・亜熱帯都市緑化植物園(TEL0980-48-3782)

最新のみどりに関する講演会

社会生活における緑の役割・効果等に関する最新の情報を提供します。

※要予約
※資料代が必要になります。
●11月7日(金)
●お問い合せ／熱帯・亜熱帯都市緑化植物園(TEL0980-48-3782)

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 1000円(予定)

※イベント実施内容は変更になる場合がございます。最新情報や詳細は公園ＨＰ等でご確認、またはお気軽にお問合せください。

首里城公園

首里城公園 10月期～12月期イベント

"芸術の秋"、首里城公園で往時にタイムスリップしてみては？

ここ沖縄でも朝、夕はすごしやすい爽やかな季節となりました。

首里城公園でも、秋のメインイベントとして「首里城祭」を首里城公園、那覇市の国際通りで開催します。また、期間中は、歴代国王の任命式である「冊封儀式」を再現したイベントと、企画展「冊封使がやってきた！～琉球を訪れた中国の貴人たち～」も併せて開催します。ぜひ、この機会に首里城の歴史を体感してみてはいかがですか。

平成20年度「首里城祭」期間：10月24日(金)～11月3日(月) 11日間

平成19年度 冊封儀式の様子(首里城公園御庭)

【冊封儀式】

冊封儀式は、中国皇帝の名のもとに琉球国王を任命する儀式です。1800年に実施された際の歴史資料を基に、その儀式の中で最も重要な一部を今回、再現します。守礼門から下之御庭まで、冊封使行列も行います。

期　間：平成20年10月25日(土)
場　所：首里城公園　冊封使行列(守礼門～御庭)、冊封儀式(御庭)
時　間：11:50～13:10

平成19年度 琉球王朝絵巻行列の様子(那覇市国際通り)

【琉球王朝絵巻行列】

琉球王朝文化の集大成として、特色ある首里城郭内イベント「琉球舞踊・組踊」「古典音楽」や、国際通りにおいては、国王・王妃並びに冊封使、芸能団体約1,000人規模の「琉球王朝絵巻行列」を展開します。

期　間：平成20年10月26日(日)
場　所：那覇市国際通り
時　間：12:30～14:30

平成19年度 古式行列の様子(首里城公園)

【琉球王朝祭り「古式行列」】

首里周辺地域イベントとして、琉球王朝時代の国王の行幸の一つで、正月三日「初行幸」と呼ばれる三ヶ寺参詣行幸の行列を再現したものです。

期　間：平成20年11月1日(土)
場　所：首里城公園(御庭～守礼門)、首里城周辺(県道49号線、県道29号線)
時　間：12:50～15:30(予定)
連 絡 先：首里振興会(TEL 098-886-5547)

企画展　「冊封使がやってきた！～琉球を訪れた中国の貴人たち～」

琉球国王は代替わりごとに中国皇帝から国王と認められ、辞令書をもらっていました。この辞令書を皇帝に代わり琉球国王に手渡していたのが冊封使です。今回の企画展は、琉球を訪れた最高の貴人である冊封使の足跡を、現存している関係資料等をとおしてたどります。この機会にぜひご覧ください。

◀ 嘉慶帝の誥命(かけいていのこうめい)

期　間：平成20年9月21日(日)～12月13日(土)
展示場所：首里城公園南殿2階特別展示室(有料区域内)
展示資料：徐葆光書(じょほこうしょ)、冊封使行列図(さっぽうしぎょうれつず)他

財団からのお知らせ

平成20年度

あなたの研究をサポートします

海洋博覧会記念公園管理財団　調査研究・技術開発助成事業　募集のおしらせ

当財団では、「平成20年度　海洋博覧会記念公園管理財団　調査研究・技術開発助成事業」を開始致しました。皆様からの多数のご応募を期待しております。

応募対象者
大学、公益法人、NPO、民間企業等の団体または個人

助成対象者数
若干名

助成の対象となる事業
亜熱帯性動物・植物及び公園機能の向上に関する調査研究または技術開発　詳しくはホームページをご覧下さい。

調査研究等期間
原則として1年間

助成金額
調査研究　1件あたり100万円以内
技術開発　1件あたり200万円以内

応募方法
助成を希望される方は、所定の申請書に必要事項を記入し事務局まで持参もしくは郵送で提出してください。
募集要領・実施要領のダウンロード
kaiyouhaku.jp/josei

応募の締め切り
平成20年10月15日　(必着)

結果の通知
平成20年11月下旬　(予定)

問い合わせ及び申請書提出先
財団法人海洋博覧会記念公園管理財団
本部　研究所開設準備室
〒905-0206　沖縄県国頭郡本部町字石川424
TEL.0980-48-3595
FAX.0980-48-3339